

## [調査報告]

# ロシア所在日本関係史料

有泉和子

この夏機会を得てロシアの文書館で史料調査をすることが出来た。本稿ではそのありさまを簡単に紹介した上で、在ロシア文書館史料の抱える問題点を指摘したい。今回調査の対象としたのは、ペテルブルグのロシア国立海軍文書館、モスクワがロシア帝国外交史料館とロシア国立図書館古文書部<sup>1</sup>の三ヶ所である。残念ながら日程があらかじめ決まっていたため、必ずしも十分であったとは言えないが、第一回の調査としては、ある程度の進展はあったものとする。2000年4月から始まった、東京大学史料編纂所「COE形成プログラム 前近代史料遺産プロジェクト」の一環、平成14年度科学研究費補助金12CE2001石上英一研究代表「前近代日本史料の構造と情報資源化の研究」の一部である。今回の史料調査は下準備の段階でほぼ二年を要したが、その事に触れる前に、先ず同研究所について簡単に紹介しておきたい<sup>2</sup>。

## 東京大学史料編纂所

東京大学史料編纂所は、「本邦に関する史料の研究、編纂及び出版」を目的とし<sup>3</sup>、東京大学の付置研究所として本郷キャンパス内に設置されている、日本史学の一大求心地である。主な事業は、内外の日本史関係史料の調査・研究・蒐集、および、史料学的研究の上に史料集として編纂することであるが、データベース化・デジタル化による歴史情報処理や肖像・絵図・屏風絵の画像史料研究にも取り組んでいる。在外日本関係史料はマイクロフィルムと写真帳の形で蓄積される。調査研究部門は古代史料部門・中世史料部門・近世史

<sup>1</sup> Российский Государственный Архив Военно-Морского Флота (РГАВМФ): Санкт-Петербург, Архив Внешней Политики Российской Империи (АВПРИ): Москва, Российская Государственная Библиотека Отдел Рукописей (ОРРГБ): Москва.

<sup>2</sup> 以下の記述は『東京大学史料編纂所要覧』1994-2001, 『東京大学史料編纂所報』1967-2001, 『東京大学史料編纂所研究紀要』1991-2002, 東京大学史料編纂所集発刊百周年記念国際シンポジウム『史料学と史料研究』所収 宮地正人「史料編纂所の歴史とその課題」2002.1, 東京大学史料編纂所集発刊百周年『時を超えて語るもの 史料と美術の名宝』所収黒田日出男「歴史と美術の〈対話〉」, 宮地正人「史料編纂所の組織と編纂事業のあゆみ」, 山田邦明「史料探訪の展開と写本の集積」, 横山伊徳「東京大学史料編纂所の歴史情報研究」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』1998.3-2002.4等の記述による。具体的個所は夫々に記す。

<sup>3</sup> 「国立学校設置法」第4条昭和24年5月31日法律第150号。

料部門・古文書古記録部門・特殊史料部門・画像解析センター等に分かれ、古代から明治維新までを対象とし、また技術部門には史料保存技術部があり、技術官は史料の復元や模写を担当する。在外文書館としては主に蘭・英・米・独・仏・墨・西・伊等を扱ってきたが<sup>1</sup>、三年ほど前からロシア文書館も研究対象になった<sup>2</sup>。原本のほか、マイクロフィルム<sup>3</sup>の形で収集された史料は、複製本にするなど、研究者に公開され、年間閲覧者はのべ万人を超えるという<sup>3</sup>。

一昨年と今年の三月<sup>4</sup>、宮地正人教授（現歴史民俗博物館館長）が中心となって「ロシア所在日本関係史料をめぐるシンポジウム」、「日露関係史料に関するシンポジウム」という研究会が開かれた。前者にはロシア国立海軍文書館副館長のマリーナ・マレヴィンスカヤ氏、ペテルブルグ東洋学研究所研究員ヴァジム・クリモフ氏を主賓に、後者にロシア国立海軍文書館元副館長のタチアーナ・フォードロワ氏、ペテルブルグ東洋学研究所研究員（現ペテルブルグ大学東洋学部教授）ヴァジム・クリモフ氏を主賓に招き、活発な討論が行なわれた<sup>5</sup>。日本側はロシア学関係では中村喜和・一橋大学名誉教授、保田孝一・岡山大学名誉教授、米重文樹・東京大学教授が、日本史学関係では史料編纂所の横山伊徳教授、保谷徹助教授、小野将助手、麓慎一・北海道大学助手（現新潟大学助教授）をはじめ、多くの方々が参加した。

昨年の研究会では、引き続き第二部として、史料編纂所所蔵の日露関係画像史料を宮地教授・保谷助教授の案内で見学する。見学した史料の中には、平成十三年十二月十一日から十四年一月二十七日まで東京国立博物館・平成館において開かれた、東京大学史料編纂

---

<sup>1</sup> 東京大学史料編纂所『日本関係海外史料目録』は、第1-5巻がオランダ国所在文書、以下同様に、第6-8巻がイギリス、第9-10巻アメリカ、第11巻スイス・ドイツ・スウェーデン、第12巻ヴァチカン・イタリア・ポルトガル・スペイン・メキシコ、第13巻フランス、第14巻オーストリア・インド・インドネシア、第15巻英・米・オーストリア・デンマークの所在文書となっている。

<sup>2</sup> 宮地正人「ロシア国立海軍文書館史料調査報告」『東京大学史料編纂所報』第35号、2000年10月、131、167、188頁。宮地正人・横山伊徳・小野将「ロシア連邦ウラジオストック市所在幕末維新时期日本関係史料調査」『東京大学史料編纂所報』第36号、2001年10月、3、136頁。

<sup>3</sup> 『東京大学史料編纂所要覧』1994-2001年。

<sup>4</sup> 2000年3月9日、2001年3月8日。

<sup>5</sup> 「ロシア所在日本関係史料をめぐるシンポジウム 研究会シンポジウム報告」、マリーナ・エヴゲーニエヴナ・マレヴィンスカヤ「ロシア国立海軍文書館の歴史と所蔵史料」、ヴァジム・ユーリエヴィチ・クリモフ「ロシア東洋学の歩みによせて」、保田孝一「利用者の立場からロシア文書館のあり方を語る」、宮地正人「ロシア国立海軍文書館所蔵1860-61年長崎関係史料について」『東京大学史料編纂所研究紀要』第11号、2001年3月。「日露関係史料に関するシンポジウム」宮地正人「日露関係史を史料編纂所所蔵画像史料から考える」、タチアーナ・フォードロワ『18-19世紀ロシアの太平洋調査・測量』（史料集三冊本）の編纂・研究体制について『東京大学史料編纂所報』第36号2001年10月。

所集発刊百周年記念事業「時を越えて語るもの 史料と美術の名宝」<sup>1</sup>にも出展された「ロシア使節レザノフ来航絵巻」もあり、壮大で保存の良い美しい画像は、皆の注目を集めた。また2001年1月には、ロシア国立海軍文書館館長の小淵基金による招聘の受け入れ先となり、2003年3月にもロシア国立海軍文書館館長を主賓に研究会が行なわれる予定である。

埴保己一が寛政五年（一七九三）に和学講談所を開設、さらに享和元年（一八〇一）『六国史』以降の史料編纂を幕府に建言してから、昨年は二百年に当たる。現在、東京大学史料編纂所はその創設を、明治二年（一八六九）三月和学講談所跡に史料編輯国史校正局が開設され、同四月三条実美に明治天皇宸筆の勅書が出された時をもってする。この百年以上に及ぶ長い歴史の中で、在ロシア文書館における日本史関係史料の調査収集は、今後百年を懸けた事業だと宮地教授は話され、また、保谷助教授は今後二十年間は継続して研究できる人材を養成しなくてはならないと言及されている。

ソ連邦の崩壊後、ロシアは今だ政治・経済・社会的に混迷期にある。高級車や豪華なホテル・レストランを使う裕福な層や、そこまでは行かなくとも、真夏の休暇を思い思いに楽しむ人々がいる中、古びた整わない施設で、興味のない人にとっては塵屑同然の史料の保存管理を黙々となす人々がいた。経済性最優先の社会では、そのような仕事は評価されにくいのであろう。予算も十分あるとは思えない。このような状態が長く続けば、貴重な史料の分散・流失も危惧される。ロシア各地の文書館史料に詳しいロシア科学アカデミー東洋学研究所南太平洋部門上級研究員・アレクセイ・キリチェンコ氏の話によると、全体として公開の方向にあるが、政治状況に影響され、予断は許さないとのことである。

## 在ロシア文書館入館手続き

ロシア帝国外交史料館は、研究者個人が自己の研究目的で行く場合、非常に時間のかかる正規の手続きを要し、一ヶ月以上はかかるという。史料館の門は常時閉鎖されており、

<sup>1</sup> 東京国立博物館・東京大学史料編纂所主催。『東京大学史料編纂所集発刊百周年記念事業「時を越えて語るもの 史料と美術の名宝」出品目録』によると、全出品作品百六十一一点、うち国宝十一一点、重要文化財五十点、重要美術品一点。百五点は東京大学史料編纂所所蔵品。保谷助教授によると、同研究所が外部に所蔵品を持ち出したのは、今回が初めてのことという。また、藤田覚東京大学大学院人文社会系研究科教授は「重文は出納がうるさいので、研究者ですら一生に一度見られるかどうかのものなのです」と話された。『時を越えて語るもの...』図録。「特集 東京大学史料編纂所集発刊百周年記念特別展 時を越えて語るもの...」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第15号、2001年10月。保谷徹「特集 時を越えて語るもの...」『国立博物館ニュース』第650号、2001年11-12頁。保谷徹「時を越えて語るもの」『学内広報』No.1239、東京大学広報委員会、2002年5月15日。高橋昌明「「時を越えて語るもの」を見て」『歴史評論』No.629、2002年9月。

門の脇にある小さなくぐり戸も封錠されていて、ブザーを押すと僅かな時間開く。看板等一切なく、そこが何であるか、知っている者でなくては分からない造りになっている。入館に伴う手続きは、すべて事前許可によるので、その場での入館証の作成はなく、入り口ではパスポートの提示のみである。ここには警官が一名常駐しているが、その必要もないくらい、入り口そのものがどこにあるかわかりにくい。閲覧室への入室に関しては、専門・所属・身分・住所・滞在先等をその場で記入するが、事前に必要な入館申請の段階で、具体的で詳細な研究テーマ、略歴の記入、推薦人等も必要となる。

史料は請求してから出てくるのに三労働日かかる。つまり例えば、金曜日に請求すると次週の木曜日ということになる。許可が下りるのは一つの出納単位<sup>1</sup>づつで、それを見終わらなくては、次のものは請求できない。さらに、コピーをする場合は現物を閲覧してからでなくては、請求することは出来ず、それぞれに三労働日かかるため、コピーをするだけで、非常に時間がかかる。料金はホテルの宿泊代や博物館等の入館料と同様、国民と外国人料金が違う二重価格になっており、非常に高く、さらに定額というよりも、その場での交渉によるものようである。外国人は一枚あたり六ドルといわれたが、コピーを申しこむ人は稀なようで、閲覧室では皆が静かに書写していた。支払は正規の銀行振込であるという。

史料を出してくれる係員は、文書史料を扱う専門職員で現在二名。旧ソ連時代の役人気質そのままにプライドが高く、また実際にかかなりの権限を持っている模様で、きちんと閲覧しているか、閲覧態度まで含めて小中学校の教師のように見張っている。しかるべき情報筋によると、この人が拒否すればいくらがんばっても無駄であるとのこと。史料の請求の仕方、閲覧の仕方、コピーの請求の仕方から、閲覧室で注意事項について、始めに、懇切丁寧に教えてくれるので、大人しくそれを守ることが是非必要と思われる。しかし実際には、仲良くなるとこれまた非常に親切で、人の良いおばさまであったので、最初の印象のままに怖がる必要はない。この二人は専門職として長く勤めているが、それ以外は、本館・分館あわせて二十人いる職員は、技術職員も含めて、すべて外務省からの出向である。館長自身この六月に在外勤務から戻ったばかりの書記官で、任期は二年のローテーションであるという。

帝國外交史料館を統括する、外務省歴史文書局での事実上のトップである副局長・ベレーヴッチ氏によると、三十年を経た所蔵文書は原則的に公開するが、一方ものにより「半閉鎖」であるという。むしろ見せないことが原則のようにも感じられた。ただ、早稲田大学助教授・柳沢明氏のように実際文書自体を閲覧している日本人もおり、同氏にも閲覧に

---

<sup>1</sup> дело

関して「原則はとにかく、是非交渉してみるように。交渉のし甲斐はある」と教えられた。ただし、同氏は既に丸一年モスクワに滞在しており、その間も毎日のように史料館に通っていた模様で、さらに、中ロ外交というその専門等からいって、人脈も十分持っているものと思われる。取敢えずは、現在現役で活動しているこのような日本人専門家を捜し、教えを請う必要がある。つまり日本に研究根拠を置く日本人である限り、史料を伴った出国・史料を利用した論文の作成等に正規の手続きが要するためである。

ロシア国立海軍文書館の入館は、同文書館が既に東京大学史料編纂所と提携・協力関係にあるためもあり、外交史料館に比べて比較的簡単であったが、それでも、推薦状を付記した事前の入館申請と館長許可が必要である。さらに閲覧室で氏名・生年月日・身分・所属・住所・パスポート番号・詳しい専門テーマ等の記入を要求される。当然ではあるが、あらかじめ自分のテーマに添った事前調査は必要で、目録を見ただけに必要な文書を探し出さなくてはならない。閲覧は請求してから、半日から一日かかる。貴重書であると許可そのものがおりず、また、特別の手段でも用いない限り、マイクロ化されている文書の原本は見せては貰えない。今回閲覧できたのは、レザノフ関係文書・クルーゼンシュテルン関係文書・ゴロヴニン関係文書の一部で<sup>1</sup>、保存状態は極めて良好であった。専門家が多数いて、史料の管理をきちんとしている上に、ロシアの冷涼な気候のおかげで、カビ等の心配はないものと見える。

同館の外観は、看板等はなく、入り口もわかりづらいながら、一ヶ所常時きちんと開いており、設備等は日本の文書館とほぼ同じようなものであったが、トイレ等はすでにどうしようもないくらい古くなっており、経済的援助の必要を強く感じた。ただ、比較的最近交代した現館長は、経済的進取の気性に富んでいるものと見受けられ、史料の保存より経済性を非常に重視しているのが、危惧された。史料の利用者としては甚だ矛盾した感情ではあるが、帝國外交史料館くらいの守りの固さも必要ではないかと、やや不安に感じられるものがあつた。

ロシア国立図書館にも日本関係史料が比較的多数存在していることが、事前調査で判つた。入館は簡単で、パスポート・写真・申請書をその場で提出して、簡単な面接を受けた上ですぐに作ってくれた。ただし、古文書部での閲覧には所属機関長からの派遣状・推薦状、あるいは、館長宛の申請状をあらかじめ提出した上で、許可を得る必要がある。残念ながら、今回は夏季改修期間に当たってしまい、開架図書は閉鎖、古文書部も機能がほとんど停止していた。

検索はカードのみで、日本同様、書名・著者名・分類で牽くが、カード自体から得られ

<sup>1</sup> Ф.14. Крузенштерн Иван Федорович, адмирал ; Ф.166. Головин В.М.; Ф. 212. Адмиралтейств-коллегия.

る情報は、これまた日本と同様で、極めて限られており、あらかじめ調査研究した上で、最終的には現物を閲覧するという、非常に常識的な方法しかなさそうである。また、カード自体の整備も遅れているように見うけられ、特に古文書部には、分類あるいはキーワードで検索する方法はなかった。既にその分野を研究しているロシア人研究者の助けでもない限り、なまじではない時間がかかりそうである。なお、同図書館には、日本語の文献目録があるはずであるが、機能停止の部分にあり、閲覧が出来なかった。

## 在ロシア日本関係史料をめぐる今後の課題

日本の対露関係は、初期のものとしては、ピョートル大帝時（在位 1682(89)–1725）、日本の元禄年間（1688–1703）の「大坂ひち屋」の伝兵衛、同大帝時で正徳年間（1711–15）のサニマ、アンナ女帝時（在位 1730–40）、享保年間（1716–35）の薩摩国若宮丸ゴンザ・ソウザ、エカテリーナ二世時（在位 1762–96）、寛保・延享年間（1741–43,44–47）の南部領佐井村・竹内徳兵衛等の漂流、及び、皇帝の命により設立された日本語学校での彼等によるロシア人への日本語教育が知られる<sup>1</sup>。漂流日本人の確保、或は、漂着日本人の本国送還に関する訓令も出され<sup>2</sup>、将来の対日関係を念頭に置いたロシア国家の外交の一端を窺わせる。

一般に当時のロシアは日本との貿易を求めていたとされるが、それが一皇帝の東洋への関心ではなく、外交的・商業的に政策的なものかは疑問の余地が残る。漂流民を教師とした日本語学校は教師の質や確保の点で永続的なものには成り得ず、同時期の満州語教育に比べて訓令等も少ない<sup>3</sup>。また遥か遠方で、地理的にも未知な日本への長期の探検・遠征航海は莫大な資金を必要とし、通過各地域との外交関係上、途中の食料その他の物資補給は必ずしも簡単ではなかった上、通航そのものもしばしば遮断されたため<sup>4</sup>、両者はふたつながらしばしば中止された。特に前者は目立った成果を上げることも、後代に引き継がれることなく中断する。だが後者は順調とは言えないまでも着実に成果を上げ、世界地図作

<sup>1</sup> 村山七郎「ロシアの日本語学校について」『早稲田大学図書館紀要』五、1963年。中村喜和「ロシアの東方進出と日本の漂流民」『日本庶民生活史料集成』第五巻、三一書房、1968年。

<sup>2</sup> 秋月俊幸『日本北辺の探索と地図の歴史』北海道大学図書刊行会、1999年、105頁。

<sup>3</sup> Куликова А. М. Востоковедение в российских законодательных актах: конец XVII в. – 1917 г. СПб.: Центр "Петербургское Востоковедение", 1993. С.60-133.

<sup>4</sup> たとえばゴロヴニン等の乗ったディアナ号は、日本への航海の途中、交戦国であったイギリスによって、喜望峯沖で拿捕されている。Головнин В. М. Записки флота капитана Василия Михайловича Головнина о приключениях его в плену у японцев в 1811, 1812 и 1813 годах, с приобщением замечаний его о Японском государстве и народе. Хабаровск, 1972. С.11–12. 井上満訳『日本幽囚記』岩波文庫、1943年、41–46頁。

成という形で後世に引き継がれた。十五世紀から始まる「大航海時代」以降<sup>1</sup>、マルコ・ポーロ『東方見聞録』<sup>2</sup>の「ジバング伝説」や「金銀島伝説」等に触発された世界的な東洋への関心・憧れ以外に、帆船の造船・航海技術が各段と進歩・発達してきたからであり、また実際に莫大な商業的利益をあげ、それを基礎に強大になる国々が出現したという世界的傾向に後押しされたからである。ロシアの東方進出に関しては関しては、例えば平岡雅英・高野明・大橋與一・秋月俊幸等、諸氏の研究がある<sup>3</sup>。

だが、手工業が発達し、対アジア貿易を独占する半国営企業である東インド会社経営を成功させたイギリスやオランダと違い、産業は農業、或は毛皮採取を目的としたシベリアでの狩猟が中心で、工業的後進国であるロシアにとって、食料が自給でき、毛皮必要としない暖国・日本の市場的価値は対中国貿易、あるいは対北米進出の拠点の為の食料補給基地としての役割以外に低かったに違いない。一方で対中国貿易は1689年ネルチンスク条約・1727年キャフタ条約・1858年アイグン条約等で辛うじて均衡を守っている清国との境紛争を抱え、北米進出は入植民の食料補給が思うままにならず、頓挫しがちであった。清国を刺激しないようにとの訓令や北米植民地救済を訴える嘆願がしばしば出されたことにより裏付けられる。

対露関係は日本の内政面に与えた影響が大きく、日本史方面では宮地正人・藤田覚<sup>4</sup>氏が、西洋史では木崎良平<sup>5</sup>・保田孝一氏<sup>6</sup>その他の方々がそれぞれの時代・分野で精力的な研究を続けておられる。だが、一般的に日本史・ロシア史双方の分野とも、互いの領分を侵さず研究しているのが現状で、必ずしも双方の史料をつき合わせた上での研究が行なわれているわけではない。日露双方の史料を扱った上での大きな先行研究としては、郡山良光氏の1970年国書刊行会発行『幕末日露関係史研究』があるが、残念ながら郡山氏は既に亡くなっている。現在日露両国の史料が完全に扱える専門家は上記秋月・宮地の両氏しかおらず、しかも、宮地氏は研究職を離れて管理職として多忙な中にある。

<sup>1</sup> 『大航海時代叢書』岩波書店、1965-87年。

<sup>2</sup> 月村辰雄・久保田勝一訳『全訳マルコ・ポーロ東方見聞録』岩波書店、2002年3月。

<sup>3</sup> 平岡雅英『日露交渉史話』筑摩書房、1944年。高野明『日本とロシア』紀伊国屋書店、1971年。大橋與一『帝政ロシアのシベリア開発と東方進出過程』東海大学出版会、1974年。秋月氏上掲書。

<sup>4</sup> 藤田覚『幕藩制国家の政治史的研究 天保期の秩序・軍事・外交』校倉書房、1987年。同『天保の改革』吉川弘文館、1989年。同『遠山金四郎の時代』校倉書房、1992年。同『松平定信 政治改革に挑んだ老中』中公新書、1993年。藤田覚編『幕藩制改革の展開』山川出版、2001年。

<sup>5</sup> 木崎良平『永寿丸魯西亜漂流記』明玄書房、1982年。同『漂流民とロシア』中公新書、1991年。同『光太夫とラクスマン 幕末日露交渉史の一側面』刀水書房、1992年。同『仙台漂流民とレザノフ 幕末日露交渉史の一側面(二)』刀水書房、1997年。

<sup>6</sup> 保田孝一編『文久元年の対露外交とシーボルト』岡山大学吉備洋学資料研究会、1995。保田孝一『最後のロシア皇帝ニコライ二世の日記』朝日選書403、朝日新聞社、1990年。

日露両国の関係はせいぜい三百年にしか成らない。にもかかわらず、在ロシア文書館には膨大な日本史関係史料が残されている。これらの史料は、貴重な学術資料として最良な形で保存されなくてはならない。東京大学史料編纂所には、明治以降『大日本史料』・『大日本古文書』・『大日本古記録』・『大日本近世史料』・『日本関係海外史料』・『大日本維新史料』・『花押かがみ』・『日本荘園絵図聚影』といった既に千冊をこえる史料の編纂を、決して名前を表に出すことなく営々と受け継いできたけてきた数多くの研究者がいる。また日本各地の文書館・史料館にも、このような地味な仕事を続けてきた多くの研究者・技術者がいるに違いない。現在の在ロシア史料の保存には、こういった無私の人々の協力が是非とも必要である。たとえ学問的なものであれ、史料の調査発掘を手柄にし、自己宣伝に使うような人間には勤まらない。あくまでも個人の性格とはいえ、史料を荒らすような人間に間違っても協力を求めてはならない。

さらに既に述べたように、史料を扱う能力の点でも不安は大きい。日露双方の文書が読める研究者は、今後も多くは出現しないかもしれない。かつて宮地教授は、東京大学大学院人文社会系研究科日本史専門分野の入学ガイダンスで「我々は研究者ではない。文書を扱う特殊能力を有した技術者である。諸君はそのように心得て欲しい」といったという。

文書は、決して公開せず厳重に管理すれば、長期にわたり保存が可能になる。特にロシアのように、日本と違って湿度の被害を受けにくい地域ではなおさらであろう。二百年も前に日本を訪れたレザノフ・クルーゼンシュテルン・ゴロヴニンといった人々の手書きの文書が良い状態で保存されていた。また、文書館職員達に職業人としての誇りを見ることができた。文書は非公開で厳重に保管すればさらに永く保たれるであろうが、それでは宝の持ち腐れになり、学問の進展には役に立たない。公開すれば、当然傷みが生じる。この相容れない矛盾する条件を、ふたつながら可能な限り両立させて行くことが必要になる。我々皆の自覚と努力が必要であろう。

(2002年9月)



## Исторические материалы по Японии в российских архивах

АРИИДЗУМИ Кадзуко

Три года назад под руководством профессора Мияти Масато Историографический институт Токийского государственного университета приступил к работе коллекционировать исторические материалы по Японии, находящиеся в российских архивах. Институт в первую очередь установил научную связь с Российским Государственным Архивом Военно-Морского Флота (РГАВМФ) в Санкт-Петербурге и в 2000-м и 2001-м гг. проводил в Токио совместный симпозиум на тему «Исторические материалы по японо-российским отношениям». Автору настоящей статьи по командировке от Института в июле сего года представился случай работать, хотя в короткий срок, в РГАВМФ в Санкт-Петербурге, в Архиве Внешней Политики Российской Империи (АВПРИ) и в Отделе Рукописей Российской Государственной Библиотеки (ОРРГБ) в Москве.

Из названных Архивов АВПРИ отличается от других тем, что он является ведомственным, находится под ведением Историко-Документального Департамента МИДа. В связи с этим доступ туда нелегкий: чтобы получить разрешение, нужны сложные процедуры и немалое время, как правило, более месяца. Работать в Архиве тоже требует немалого времени: для выдачи дела нужно по крайней мере три рабочего дня, а для заказа копирования — еще три. Цена на копирование разные для российских и иностранцев так же, как и в гостинице, в музее и т.д. При этом цена зависит от характера документов, т.е. фактически «договорная». Сотрудников насчитывает 20 человек, из них только два архивиста, все остальные переходят из МИДа по ротации. Сейчас Архив в принципе открыт, но по мнению А. Кириченко, большого знатка российского архивного дела, не вполне исключается возможность, что вдруг он закроется из-за политических обстоятельств. По сравнению с АВПРИ доступ в РГАВМФ свободнее, и специалистов гораздо больше. Надо сказать, что архивисты в обоих Архивах с большой гордостью относятся к своему делу. А новый директор РГАВМФ, человек предприимчивый, уделяет большее внимание экономической стороне, чем сохранению исторического достояния Архива. Нужна, по-моему, экономическая помощь в той или иной форме со стороны Японии.

Несмотря на то что история японо-российских отношений насчитывает лишь триста лет, в России сохраняется огромное количество материалов в данной области, которые сохраняются в хорошем состоянии благодаря честным усилиям архивистов. Для того, чтобы

по-настоящему коллекционировать исторические материалы в российских архивах, по словам профессора Мияти Масато, нужно по крайней мере сто лет. А для успешного выполнения этой задачи необходимо честное сотрудничество всех тех, кто относится к историческому достоянию не из личного тщеславия исследователя, а в общих интересах научного развития в обеих странах.